

継承伝統 共架金橋（伝統を受け継ぎ、共に金の橋を架けよう）

創立者池田大作先生訪中 40 周年記念講演会

程 永 華

こんにちは。創価大学で新しく建てられた「中央教育棟」を訪れ、大学の教員・学生と一堂に集い、交流することを大変嬉しく思います。今年はあたかも創立者池田大作先生の初訪中また周恩来総理との会見 40 周年に当たります。今日の交流を通じて、池田先生が数十年来中日友好のために努力された意義をより深く理解し、私たちが如何にして中日両国人民の友好のために尽くしていけるかを考えたいと思います。馬場善久学長、田代康則理事長をはじめ大学側のご厚意あふれるご招待と念入りな手配に感謝し、また広範な教員・学生と友人の皆様から今回の講演に寄せられた関心と支持に感謝申し上げます。

創価大学は私の母校であり、私はここで日本語と大学課程の教育を受け、貴重な青春の日々を送りました。キャンパスの一本一本の草木までよく覚えており、懐かしさで一杯です。創価大学での勉学と生活の体験は、新中国最初の留学生である私が日本を知り、理解するための最初の窓を開き、その後中国の対日外交に携わるため、多方面の基礎を築いてくれたということが出来ます。2 年前、私は創価大学から名誉博士号を贈られ、得難い特別な名誉と考えています。この機会を借りて、再度創価大学に敬意と謝意を表する次第です。

教官、学生、友人の皆様

ご承知の通り、中日関係は前世紀前半に日本の軍国主義による中国侵略戦争という不幸な歴史を経験しました。戦後の 50 年代から 70 年代はじめにかけて、両国関係は長い間、不正常的な状態にありました。こうした不利な局面の下で、双方の古い世代の政治家と各界の有識者は民で官を促し、経済で政治を促す方針を堅持し、幾重もの困難を克服しました。そして両国の国交正常化実現と平和友好条約締結のために全身全霊を傾け、奔走尽力し、多くの心血とたゆまぬ努力を注ぎました。創価大学の創立者、池田大作先生はまさに、その中の重要な代表者であります。

池田先生は早くも 60 年代から、日本国内で中日友好事業を大いに提唱、支持し、中日関係の回復と発展を推進されました。国交正常化からまもない 1974 年 5 月と 12 月、両国間に直行便が開設されていない状況で、池田先生は回り回って 2 回中国を訪れ、周恩来総理と歴史的な面会を果たされました。その後 1997 年まで、中日関係が順境にあっても逆境にあっても、代表団を率いて前後 10 回の訪中を続け、大陸の南北に足跡を記し、実践行動によって中国人民の尊敬と信

頼を得、両国と両国人民間の理解、相互信頼と友情を促されました。池田先生と中国との交流から、私たちは池田先生の中日友好に対する強い信念、日本の過去の歴史の教訓に対する深い反省を見ることができ、さらに人類の大同と平和共存にあこがれる人間性の輝きを感じることができ、ここで皆さんと一緒にいくつかの具体的事例をひもとき、池田先生の中日関係に対する重要な貢献について共に理解したいと思います。

——長い目で中日国交回復を推進されました。池田先生は1968年に「日中関係正常化に関する提言」を発表し、大所高所から、世界とアジアの平和・繁栄の見地に立って中日国交回復を推進し、中国の国連加盟を支持し、日中の貿易を促進するよう提起されました。当時日本政府が反中国政策をとっている中で、このような声を上げるのは容易でなく、尋常でない政治的英知と勇気が必要でした。この後、池田先生は1974年に訪中した際、「日中間に平和への金の橋を架けよう」と述べられました。「金の橋」という言い方はイメージしやすくしかも深い意味が込められ、平和で堅固な中日関係の構築を象徴しており、両国人民の幅広い賛同と支持を得ました。

——人と人の友情のきずなを結ばれました。池田先生は両国間に人と人の友好関係を築くことを重視し、両国人民の「内心」から出た深い相互信頼の実現に尽力されました。先生は訪中の度に、中国の指導者、各界および一般の民衆と直接交流し、日本国内でも中国の友人や青年の代表と幅広く会見されました。最も言及に値するのは、池田先生が周恩来総理と特別な感情を築いておられたことです。二人は1974年12月に1回会っただけですが、誠意をもって接し、真心で付き合う手本を示しました。創価大学の「周桜」は池田先生の提案によるもので、それは京都嵐山の詩碑と共に、日本で周総理を記念する代表的な景観となっています。私はいまでも池田先生がその提案をされた様子をはっきりと覚えております。周総理夫人の鄧穎超女史はのちに周総理の遺品を池田先生に贈り、二人の友情の証としました。

——中日の代々の友好のための人材を育てられました。池田先生は一貫して、創価大学と中国の大学の学術、学生交流に関心を寄せ、それを推進されました。創価大学が私を含む最初の新中国からの留学生を受け入れ、私たちに最大限勉学と生活のよい条件を提供できたのは、まさに先生が決断され、自ら保証人を務められたおかげです。当時池田先生が自ら中国の留学生の日本語教育や生活の状況に気を配られたことは、いまでも忘れられません。いまや創価大学は中国の数十大学と友好関係を結んでいます。私たちは、創価大学を卒業した多くの日本人学生と中国人留学生が中日交流と協力の第一線で活躍し、池田先生が提唱された中日友好事業の新たなページを記し続けていることを喜んでいます。

——理解と信頼に基づき真の友人関係を発展させました。池田先生と創価学会は中国の文化を尊重し、つねに中国の発展を信頼し、支持しています。改革・開放前、中国が貧しく遅れていた時期も、その後中国経済が急速に発展した段階でも、池田先生は毎回の訪中を通じて精神面、道義面で中国と中国人民を強く支持されました。特に1990年西側諸国が中国に不当な制裁を加えていた状況下で、300人の大型代表団を率いて中国を訪問され、日本の社会と西側諸国に中国の真実の状況を伝え、当時中国に対する日本及び国際社会の理解を深めるうえで重要な影響を及ぼ

しました。中国が大きな自然災害に見舞われたとき、創価学会はいつもいち早く池田先生の見舞いの気持ちを伝えるとともに、寄付や支援を行っており、私たちはこのことをいつまでも忘れることはありません。

教官、学生、友人の皆さま

今年は池田先生の初訪中40周年にあたり、中日関係も国交正常化後、42年の春秋を重ねてきました。双方の各界の努力の下、両国関係が急速に発展し、著しい成果を取めたことを見るべきです。両国は1972年の「中日共同声明」、1978年の「中日平和友好条約」、1998年の「中日共同宣言」及び2008年の「戦略的互惠関係の包括的推進に関する中日共同声明」という4つの政治文書を調印、発表し、両国関係の政治的基礎と方向を確立しました。中日貿易は無から有へと進み、復交時の10億ドル足らずから3000億ドルに伸び、両国は互いに主要な経済・貿易パートナーになっています。人的往来は1万人から500万人余りに増加し、毎日100便近い航空便、1万人以上の人びとが両国の間を行き来しています。現在、中国に住む日本人は14万、そして日本に住む中国人は68万に達しています。両国の民間、地方及び人と文化の交流は大きく発展し、さまざまな形式と内容の交流往来が頻繁に繰り広げられています。正式に友好都市関係を結んだ双方の都市は250組余りに上り、これに友好協力関係にある都市を加えると、350組余になります。こうした重層的で、分野を越えた、全方位にわたる密接な関係は、中日関係発展の歴史でかつてなかったもので、世界各国の交流の実践でも例をみないものです。

引越すことのできない近隣の大国である中国と日本は、「和すれば共に利し、闘えば共に傷つく」ことを歴史と事実は繰り返し証明しており、両国関係の発展の成果は両国人民に実際の利益をもたらし、地域と世界の安定・繁栄をも力強く促進しています。残念ながら、日本国内の一部勢力の時代逆行の言動により、この数年、中日関係は相次いで厳しい試練を受け、幾重もの問題が同時に勃発ししかも複雑に錯綜して、国交正常化以来かつてなかった、極めて困難な状況になっています。こうした局面は両国の各分野の交流・協力にマイナスの影響を及ぼし、池田先生を含む先達の友好的な方々が奮闘努力した方向からそれ、両国人民と国際社会の期待に背いており、両国の各界の有識者は一様に憂慮しています。

目下特に両国関係にわざわざしているのは釣魚島問題と歴史問題です。この問題の由来は古く、双方の間にはかつて明確な共通認識と了解事項がありました。両国関係を改善するには、中日間の4つの政治文書の精神に従い、先達の政治家と友好的な方々の英知、遠見と勇気を受け継いで、問題を適切に処理し、両国関係の発展を妨げている政治的障壁を取り除かなければなりません。掘り下げて言えば、両国の安全保障分野における相互信頼の欠如などの問題は軽視できません。双方は相手側の発展を理性的客観的に見る姿勢を貫くべきです。そして互いに協力のパートナーとなり、脅威とならず、相手側の平和的発展を相互に支持するという重要な共通認識を堅持し、対話と意思疎通を通じて信頼を増し疑念を解き、戦略的安全保障の相互信頼を再構築すべきです。ここで指摘したいことですが、現在日本の一部の政治家がいたるところで中国脅威論を宣伝し、中日間の緊張情勢を作り、それをもって軍事、安全政策や憲法改正を推進するために利用しよう

とし、また他国と手を結んで中国に圧力を加え、対中包囲網を作ろうとしています。このようなやり方は現在の世界平和、協力と発展の成り行きとはそむくもので、しかも日本を平和発展の道から離れさせる可能性もあります。平和を愛する各界の人々がこれに警戒すべきだと思います。

教官、学生、友人の皆さま

創価大学は池田先生によって1971年に創設されました。先生は建学のはじめに、「人間教育の最高学府たれ、新しき大文化建設の揺籃たれ、人類の平和を守るフォートレスたれ」という学校運営の3大精神を決められました。それには人間、包容、平和などの理念が内包されて、学問を教え人間を育てるという方向を指摘するだけでなく、一人一人が問題を思考し処理する方式・方法の座標を提供しています。これに啓発されて、私は中日関係の処理でも、両国関係の長期安定への道を探るためにも、関連の精神的理念が必要であると考えています。

第一は人を中心にする事です。人民は歴史創造の主体で、国家間の関係を守る中流の砥柱〈柱石の意〉です。両国関係の改善をはかるときは、人民に依拠することが必要で、それ以上に人民のためを考えることが大事です。私たちは、中日友好は人心の向かうところと確信するとともに、両国の国民感情の悪化という現実をも重視し、民間、地方、経済・貿易、文化及び青少年など各分野の交流に力を入れ、共通の利益を実現すべきです。同時に、両国人民の理解と友情をたえず増進し、両国関係のための社会基盤と世論環境を整えるべきです。

第二はお互いに尊重し信頼することです。世界大同の本質は「和して同ぜず」であり、多くのものを包容することによって、多様化した発展を実現する必要があります。池田先生の「新しき大文化建設」はこういった意味も含んでいます。中日は地理的に近く、文化が通じ合い、昔から今に至るまで、大多数の時期に交流を進め互いに学びあうことによって、それぞれの発展と進歩を促してきました。アジアは広く、中日及び関係各国の共同の発展を十分受け入れられます。グローバル化がさらに進む新しい情勢下ではなおさら、相互に尊重、支持し、隣国にわざわざい及ぼす冷戦思考を捨てるべきです。相手方を敵や脅威とせず、いわゆるイデオロギーや価値観で線引きをせず、対話と協力を通じて共同の安全を実現し、繁栄と安定を促すようにすべきです。

第三は平和を守ることです。中日が平和共存の道を歩むことは唯一の正しい選択であり、戦火を交えた歴史は絶対に繰り返してはなりません。これは中日関係の「絶対道理」です。中国は平和の道を揺るぎなく歩み、「隣国に善意で接し、隣国をパートナーとする」方針及び永遠に覇権を求めない方針を貫いており、発展しても他国を脅かす考えはなく、またあり得ません。中国はいま改革の全面深化によって、中華民族の大いなる復興という中国の夢を追求しています。これは中国人民が追求する幸福の夢であり、また世界人民の夢とも密接につながっています。それが平和で安定した国内、国際環境の下ではじめて実現できます。第二次世界大戦の期間、日本軍国主義が対外侵略戦争を起こし、アジアの隣国に甚大な災難をもたらしただけでなく、日本人民も深くその害を蒙りました。戦後日本は平和発展の道を歩み、重要な成果を収めました。平和発展は日本が正反両面の経験と教訓を総括して出した正確な選択であり、日本が誇りとすべき「栄光」であり、今後も日本が平和的発展の方向を堅持していくよう願っております。当面突出な現

実問題として、中日は東海の関係海空域で危険を抱えており、双方は迅速に意思疎通と危機管理に取り組んで、不測の事態を防ぎ、平和・安定の大局をしっかりと守っていくべきです。

教官、学生、友人の皆さま

池田先生はその著書『新・人間革命』で、「民衆交流の海原が開かれてこそ、あらゆる交流の船が行き交うことができる。次は、文化、教育の交流だ。人間交流だ。そして、永遠に崩れぬ日中友好の金の橋を築くのだ！」と書いておられます。青年は国の未来と希望であり、中日友好には皆さんがこれに参加し、皆さんがこれを守り、皆さんがこれに力を捧げることが必要です。ご在席の若い学生の皆さんが池田先生及び創価大学の対中友好の優れた伝統を引き続き発揚し、中国の青年や両国各界の友好的人びとと手を携え、「金の橋」を架けるため共に奮闘努力されるよう希望します。

ご静聴ありがとうございました。